

第39回

比較文明学会大会

人類共生と文明

～ 多数派支配の世界で問いかける理念と実践～

日程

2021年11月13日(土)
14日(日)

会場

中央大学
市ヶ谷田町キャンパス
〒162-8478 東京都新宿区市谷田町1-18
(オンライン・ハイブリッド開催の可能性あり)

主催：比較文明学会
共催：中央大学政策文化総合研究所

11/13(土)

13：30－15：00 基調講演
※13：00受付開始

「ウチナンチュ・ゲイ・クリスチャンとして」

講演者： 平良愛香 (日本基督教団川和教会牧師
立教大学・桜美林大学非常勤講師)

15：10－17：30 シンポジウム

パネリスト： 山本英輔 (金沢大学 教授)
山下梓 (弘前大学 助教)
加藤久典 (中央大学 教授)

司会： 大森一三 (東京学芸大学 特任准教授)

17：30－18：00 総会

11/14(日)

9：30－12：50 個人研究発表Ⅰ
※9：00受付開始

14：00－15：30 個人研究発表Ⅱ

第 39 回比較文明学会大会

(日程： 2021 年 11 月 13 日(土)～14 日(日))

【大会趣旨】

人類共生と文明

～多数派支配の世界で問いかける思想と実践～

国際連合は、世界が目指すべき 17 項目の「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals:SDGs)を 2015 年に定めた。環境問題や貧困問題の解決、健康と福祉の向上など様々な分野の目標が謳われている。これらそれぞれの根底にあるのは人類共存の必要性に対する意識ではないだろうか。換言すれば、現在人類は多くの国や地域で「分断」の危機に晒されているということだ。連帯して共存共栄を目指す社会よりも、「社会における強者」が幅を利かせる社会に私たちは投げ出されているとはいえないだろうか。

例えば、移民や難民、LGBTQ などの性的マイノリティ、心身の障がいを抱える者、貧困に喘ぐ者、宗教的に迫害を受ける者などは常に社会の少数派として、多数派という社会の強者との緊張関係に晒されている。時として、力を持った多数派は社会において迫害や差別を繰り返す。それに対する反発として 2020 年にアメリカ合衆国で起きた黒人の生命尊重運動 (Black Lives Matter) は記憶に新しい。日本においても在日韓国人などに対するヘイト・スピーチは、法的な規制が進んでいるとはいえ、いまだに消滅していない。同和地区出身者への見えざる差別も厳然と存在している。多くの国では、宗教の多数派が少数派を迫害する現実もある。仏教徒が多数派を占めるミャンマーでは、少数派ムスリムが迫害を受け、インドではヒンズー至上主義者が少数派宗教を弾圧するとの危惧も消えない。世界一のムスリム人口を抱えるインドネシアでも、華僑を中心とした宗教的少数派に対する差別は歴史上消えることがなかった。

こうした社会の少数派に対する差別や迫害などの「実践」はどのように生まれ、何によって正当化されてきたのだろうか。そこには、それらを阻止する「思想」はなかったのだろうか。文明はこういった人類の行動を是認する「思想」を提出したのだろうか。仏教は平和の宗教だという。キリスト教やイスラームも愛や許しの教えが強調され、神の下の人間の平等も謳われている。しかし、宗教に根差した軋轢は後を絶たない。また、人類を滅亡させることが可能なほどに科学技術は進歩したが、哲学者も科学者もそれに歯止めをかけることはできていない。強者が弱者を多数派が少数派を支配、迫害する現実に対して私たちは文明の役割という観点からこれまでの検証と人類の未来について問いを發する必要があるのではないだろうか。2021 年度に開催される第 39 回比較文明学会研究大会は、多数派と少数派の関係に注目し人類共生の可能性を探求することをテーマとして開催する。

目次

比較文明学会第 39 回大会プログラム	3
基調講演・シンポジウムプログラム	4
基調講演要旨	5
シンポジウム要旨	6
個人研究発表プログラム	9
個人研究発表部会 1 要旨	11
個人研究発表部会 2 要旨	15
個人研究発表部会 3 要旨	18
個人研究発表部会 4 要旨	20
個人研究発表部会 5 要旨	23
個人研究発表部会 6 要旨	26
個人研究発表部会 7 要旨	29

比較文明学会第 39 回大会プログラム

【大会 1 日目 2021 年 11 月 13 日 (土)】

10:00～12:00	役員会 (1501 教室)
13:00～	受付開始 ※参加費は事前振り込みを基本とします 大会参加費：会員 3,000 円 非会員参加費無料 (資料を希望される場合は 500 円)
13:30～15:00	基調講演 (301 教室)：「ウチナンチュ・ゲイ・クリスチャンとして」 講演者：平良愛香 (日本基督教団川和教会牧師、立教大学・桜美林大学非常勤講師)
15:10～17:30	シンポジウム (301 教室)：「人類共生と文明～多数派支配の世界で問 いかける理念と実践～」 パネリスト： 山本英輔 (金沢大学教授) 山下梓 (弘前大学助教) 加藤久典 (中央大学教授) 司会：大森一三 (東京学芸大学特任准教授)
17:30～18:00	総会 (301 教室)

【大会 2 日目 2021 年 11 月 14 日 (日)】

9:00～	受付開始
9:30～	個人研究発表 部会 1 (301 教室 9:30～11:40) 部会 2 (701 教室 9:30～11:00) 部会 3 (301 教室 11:50～12:50) 部会 4 (701 教室 11:10～12:40) 部会 5 (301 教室 14:00～15:30) 部会 6 (701 教室 14:00～15:30) 部会 7 (901 教室 14:00～15:00)

※参加費の事前振り込みにご協力ください。同封の振替用紙を使い、氏名をご記入の上、参加費の納付をお願いします。

※本大会は会場とオンライン (ZOOM) でのハイブリッド開催となります。参加に際しては事前申し込み (<https://forms.gle/7TiopXJRDjibsja9A>) をお願いします。オンライン参加の方には、事前申し込み後に zoom の参加 URL をお伝えします。なお、会場参加にあたっては、マスク着用と消毒にご協力ください (会場参加者が多い場合は、あらためて調整させていただく場合もあります)。

基調講演・シンポジウムプログラム

人類共生と文明

～多数派支配の世界で問いかける思想と実践～

2021年11月13日（土）13:30～17:30（301教室）

基調講演者

平良愛香（日本基督教団川和教会牧師、立教大学・桜美林大学非常勤講師）

「ウチナンチュ・ゲイ・クリスチャンとして」

シンポジウム・パネリスト

山本英輔（金沢大学教授）

「理性と差別～近代的人間観を問い直す～」

山下梓（弘前大学助教）

「国際連合での「SOGI と人権」にみる差別をめぐる議論と応答の可能性」

加藤久典（中央大学教授）

「イスラームと性的少数派～インドネシアの事例から～」

司会

大森一三（東京学芸大学特任准教授）

「ウチナンチュ・ゲイ・クリスチャンとして」

平良 愛香

(日本基督教団川和教会牧師 桜美林大学、立教大学非常勤講師)

私には3つのアイデンティティがある。ここでいうアイデンティティとは、自分を構成しているたくさんの要素の中で、「これを除いたら私ではなくなる」と感じているものと定義している。私が現在自分で確認しているアイデンティティは「ウチナンチュ」「ゲイ」「クリスチャン」の3つ。3つのマイノリティ性を持っているが、しかしそのどれもが一筋縄ではいかないものだと感じている。

沖縄に生まれ、沖縄に育ったから「ウチナンチュ」なのではなく、それを「選び取った」時期とその理由がある。どうして私は「ウチナンチュ」であることを選び取ったのか。そこには歴史や痛みや、ときには加害性をも担うという覚悟が求められる。

また、男性同性愛者だから「ゲイ」というだけではなく、「男性という既得権や加害性を結果的に持ってしまう」ということをも「ゲイ」という言葉に含めて使っている。社会の異性愛主義を問いつつ、男性優位主義に抗う難しさを感じている。

そして「クリスチャン」であるということ。キリスト教徒であるということは、キリスト教がこれまで犯してきた様々な罪悪の責任をも担うということ。決して「自分は正しい」とは言い切れない。誤解を恐れずに言えば、私はキリスト教が好きではない。キリスト教によってさんざん傷つけられてきたし、現在もキリスト教やその他の宗教が多くの人を傷つけていることを知っている。ではなぜ、私はキリスト者であり続けるのか。なぜ牧師をしているのか。

更に、「ゲイ・クリスチャン」というアイデンティティ、「ウチナンチュ・クリスチャン」というアイデンティティもある。おのずと「私にしかできないこと」「私に求められていること」を考えるようになる。ところが不思議なことに、「ウチナンチュ・ゲイ」というアイデンティティはなかなか形成されない。一体どこにその違いがあるのだろうか。

多様性を大切に生きていくということは、自分が何者であるかということだけでなく、何者であろうとしているのか、ということ突き付けられる作業でもある。そしてそれは、結構楽しい。

「理性と差別～近代的人間観を問い直す～」

山本 英輔

(金沢大学)

本発表は、西洋哲学を研究する立場からシンポジウムのテーマについて考えるものである。西洋の思想史的にみるならば、「差別」問題が先鋭的に問題化してくるのは近代においてであり、「平等」や「寛容」という価値観ないしは理念と深くかかわっている。そして、これらの理念の展開は、「権利」概念の拡張の歴史としても捉えられる。奴隷制の廃止からはじまり、女性の権利の主張、民族差別や障害者差別の禁止等々が主張され、20世紀の後半には権利を動物や自然物にまで広げる思想も登場した。

しかし、権利の拡大と差別の問題化が様々展開されてきたものの、現実的にはそうした諸々の差別はなくなるどころか、繰り返され、近年は一層むき出しになっている印象さえある。これは、たんに政治、法律、教育等の制度や社会実践の課題であるというだけでなく、西洋哲学の伝統に潜んできた問題性もあると言えないだろうか。

例えば、西洋哲学の歴史は圧倒的に白人男性によるものであったし、理性を中心とした近代的人間観は、〈文明〉と〈野蛮〉という区別を行い、それは非ヨーロッパ社会に対する差別的態度を正当化することにもなっていた。

本発表では、このような西洋哲学の動向と問題性を踏まえて、2016年に起こった「相模原障害者殺傷事件（やまゆり園事件）」を取り上げ、知的障害者に対する差別について焦点を当ててみたい。この事件は、元職員の植松聖が深夜に障害者施設に忍び込み、19人の障害者を殺害し、職員を含む26人を負傷させたという類例をみない事件であった。犯行の特異性、異常性もさることながら、植松聖が述べる犯行に関連した数々の言葉にも私たちは驚愕せざるをえない。重度障害者は「不幸をつくる」存在で、「負担」であり、「不要」であり、「〈安楽死〉させるべきだ」という言葉は、広義の優生思想につながっており、意思疎通のできない者（彼の造語では「心失者」）を人間（人格）とみなさないという考えは、生命倫理学のいわゆる「パーソン論」を想起させる。私たちは、彼が吐く露骨な差別的発言に驚愕するとともに、しかし同時に、それがどこか現代技術文明に生きる我々のうちにある価値観に通じているという点でも驚愕してしまうのである。提題では、これらの点を論じながら、近代的な理性と人間観を問い直すという課題を提示したいと思う。

国際連合での「SOGI と人権」にみる

差別をめぐる議論と応答の可能性

山下 梓

(弘前大学)

本発表は、国際連合（国連）での、性的マイノリティの人々の人権をめぐる近年の動向や議論の考察を通じて、本シンポジウムの問いのひとつ「社会の少数派に対する差別や迫害などの攻撃という『実践』はどのように生まれ、何によって正当化されてきたのか。また、そこには、それらを阻止する『理念』はないのか」に答えようと試みるものである。

90年代に同性愛者の人権問題として始まった国連での取り組みは、2000年代に入り、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックス (lesbian, gay, bisexual, transgender, and intersex (LGBTI)) の人々の人権、あるいは、SOGI にジェンダー表現 (gender expression) と性的特徴 (sex characteristics) が加わった SOGIESC と人権の問題へと広がりを見せてきた。これらの進展の背景には、LGBTI の人々の生きられた経験 (lived experiences) に基づく問題提起と、たゆみない働きかけがある。

LGBTI 当事者の存在や SOGIESC と人権の問題が可視化されると同時に、この問題への国々の姿勢の二極化が顕在化した。上記決議をめぐるのは、議論が紛糾しただけにとどまらず、対抗措置として人権の促進と「伝統的価値観 (traditional values)」に関する決議も採択された。このことから、SOGI と人権を支持する西洋諸国、伝統的価値観を支持するロシア、中国、中東諸国という対立の構図ができているかのように見える。

しかし、これには、3つの理由から批判的なアプローチが必要である。第一に、SOGI と人権を支持するの国々＝この問題をめぐって進んでいる国々（旧植民地大国）、伝統的価値観を支持する国々＝遅れている国々（主に旧植民地）をとらえることは、旧植民地大国の現代における覇権を追認することになりかねないためである。第二に、進んでいる国々、遅れている国々という単純化されたとらえ方は、支持的にみえる国における LGBTI の人々に対する差別や暴力を見えにくくする恐れがあるためである。第三に、「遅れている国々」の LGBTI の人々にとって「進んでいる国々」が救世主であるかのようなとらえ方につながり、LGBTI の人々が人権の主体から救済の客体に減ぜられてしまうためである。これらから、差別や迫害を阻止し得るものとして、覇権・権力への批判的アプローチ、生きられた経験の中心化、批判的人権アプローチが導かれ得る。加えて、国連 SOGI 独立専門家の実践から、対話の可能性についても検討する。

イスラームと性的少数派～インドネシアの事例から～

加藤 久典

(中央大学)

インドネシアは近年、その経済発展により東南アジアのみならず国際社会全体においても重要な位置を占め始めている。しかしながら、経済的な側面とは別にインドネシアには注目すべき文明的特徴がある。まず、17,000にも及ぶといわれている島々に約2億7千万の人々が、それぞれの歴史と伝統を守り現在まで伝えているという多文化性である。それは同時に、先祖崇拝、精霊崇拝、ヒンズー教、仏教、イスラーム、キリスト教などの信仰が混在する文明的な重層性を示している。また、ムスリム(イスラームの信者)の数は、一国としては世界最大でイスラームの大国であるという点もインドネシアの大きな特徴である。

しかしながら、インドネシアではイスラーム法(シャリーア)を国法とはせず共和国制を採用し、イスラーム以前の諸文明との共存を目指した国づくりを進めている。これはイスラームと国家の関係を考えるうえで、一つのモデルとしてとらえることが可能ではないだろうか。

イスラームは今日、その信者数が世界的に増加傾向にあり、今後非イスラーム圏との関係も注目される。人類の共存という視点から考えた場合、イスラームが社会における少数派と多数派をどのように扱うかということが重要になる。例えば、絶対的少数派である男性女装者はインドネシア社会では、一般的にワリアと呼ばれ差別の対象になることが多い。その一方で、インドネシアには世界的にも稀なワリアのためのイスラーム寄宿舎学校(プサントレン)がある。このプサントレンは、ワリア自身によって設立され運営されている。

この性的少数派であるムスリム男性女装者・ワリアたちは、ムスリムが多数派を占めるインドネシア社会においてどのように暮らしているのだろうか、宗教的にはどのように理解されているのだろうか、また社会的な認知を受けているのだろうか。本発表ではイスラーム法学者たちのプサントレンに対する見解、近隣住人たちの反応などを含め、発表者の現地調査をもとにして世界最大のイスラームの国における性的少数派の現状を報告し、社会的少数派と多数派の関係について宗教を軸に考察したい。

個人研究発表 —— 11月14日（日）

部会1 座長：加藤久典		301 教室 9:30~11:40
Jon Morris (駒沢女子大学人間文化学類)	Redescribing medieval cosmology: a comparative study of Japanese and Western European hagiography.	
小貫寛哲 (SOAS, University of London)	Motivation System and Subjective Recognition of Japanese Learning among Technical Intern Trainees in Japan: Analyzing L2MSS and Social Factors through Ethnographic Research.	
Januar Radhiya (Chuo University/STBA YAPARI ABA Bandung)	"DO YOU STILL REMEMBER WHAT YOUR PARENTS SAID?": RECALLING PARENTS' ADVISING ACTS BY INDONESIAN MILLENNIALS ON TWITTER.	
喜多文子 (中央大学政策文化総合研究所)	<i>Hojoki</i> with Special Reference to Basil Bunting's English Translation, "Chomei at Toyama"	

部会2 座長：小倉紀蔵		701 教室 9:30~11:00
篠原典生 (中央大学総合政策学部)	兼愛非攻—墨子の思想、あわせて Me-Ti について	
汪義翔 (東京理科大学)	汪義翔遼河文明の「玉龍」から黄河文明の龍字まで—中国文明の起源を検討する課題として	
山下範久 (立命館大学グローバル教養学部)	世界=生態論のメタ研究プログラム：世界システム分析の人新世的拡張にむけて	

部会3 座長：小平健太		301 教室 11:50~12:50
吉野浩司 (鎮西学院大学現代社会学部)	20世紀初頭の亡命ロシア社会学者による文明変動論—P.A.ソローキン、G.ギュルヴィチ、N.ティマシエフを例に	
安達未菜 (東海大学文化社会学部)	南フランス、オクシタニーの領域性とアイデンティティ——統一国家における地域多様性の視点から	

部会 4 座長：中牧弘允		701 教室 11:10~12:40
岩澤知子（麗澤大学）	中世諏訪の神仏習合「諏訪流神道」における胎生学的思想	
高城建人（京都大学大学院 人間・環境学研究科）	『民主主義と私』という著書から見る 1950 年代における趙炳玉の民主主義思想の特徴－李承晩との比較を中心に－	
銭正枝（京都大学大学院 人間・環境学研究科）	岡倉天心の「日本美術史」から見た東洋思想	

部会 5 座長：濱田陽		301 教室 14:00~15:30
平野葉一（東海大学文学部文明学科）	「環境 QOL」概念の導入と展開－現代文明における環境とアイデンティティの関わりから	
秋丸知貴（上智大学グリーンケア研究所）	エーリッヒ・ノイマンの比較文明論——『芸術と創造的無意識』（1954 年）を手掛かりに	
服部匡成（文明法則史学研究所、トインビー歴史の研究会）	文明の生成発展の要件～ダニレフスキー、トインビー、村山節の比較から	

部会 6 座長：小西暁和		701 教室 14:00~15:30
小林雅博（神奈川工科大学、東京基督教大学）	人新世における自然の問題をめぐって	
星野克美（多摩大学）	地球気候力動性の絶滅哲学——地球気候体実在論と人類絶滅	
犬塚潤一郎（実践女子大学）	視覚技術と時間：記憶と自由の危機と回復	

部会 7 座長：梅原宏司		901 教室 14:00~15:00
林正博（東京都市大学理工学部）	アングロスフィアに対する比較文明論的考察	
三枝守隆（トインビー歴史の研究会、立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻）	サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』が語っていたもの——還元主義を超えて	

Redescribing Medieval Cosmology: A Comparative Study of Japanese and Western European Hagiography.

MORRIS Jon

(駒沢女子大学・人間文化学類)

What does heaven look like and sound like, and what does holiness smell like? Modern Europeans and East Asians probably have an answer to this; that if it is a sensory experience in any way, then it looks, sounds and smells very good. Many, though, would be uncomfortable with such material expressions of the spiritual in a way it seems the people of the Middle Ages generally were not. A growing body of work in Europe and Japan has examined the richness of the sensory world of the Middle Ages, and its relationship with the divine.

This presentation introduces key theoretical concerns relating to periodization and comparative research and applies these to hagiographic literature in Japan and Europe. Drawing in particular on the Heian *Ōjōden* (Tales of Rebirth in the Pure Land) and the *Legenda Aurea*, I explore “concepts or perceptions of relative wealth or poverty” related to heaven and the afterlife in the context of Medieval concepts of luxury and purity. I also explore the significance of a period of preparing for death in relation to questions of liminality in life, death and the location of the soul after death which are raised by the *Legenda Aurea* and *Ōjōden* materials. Through these materials, we encounter the theme of pure and impure people and worlds, which have clearly marked points of physical ingress into this world. These considerations lead to, in Jonathan Smith’s theoretical terms, a “redescription of the exempla” relative to a “global Middle Ages”, if such a concept may survive its infancy. I conclude that using categories and questions which apply specifically to each tradition with material from both traditions can be useful in identifying aspects of a tradition in more a more abstract, less limited context.

Motivation System and Subjective Recognition of Japanese Learning among Technical Intern Trainees in Japan: Analyzing L2MSS and Social Factors through Ethnographic Research

小貫 寛哲

(SOAS, University of London)

This research will examine subjective recognitions for learning Japanese among technical intern trainees from Southeast Asia in Japan, and analyze the factors affecting the change. This paper aims to answer the questions “What kinds of factors affect motivation for Japanese learning among trainees” and “How do trainees generate their motivation to learn Japanese”. How adult immigrants face the host language and host society will be analyzed and discussed. In the field of technical trainees, the system of training is problematic and is often discussed from a political perspective, but trainees’ cognition toward Japanese learning is rarely examined. This research will contribute to our understanding of how trainees and other immigrants face a second language and adapt to the host society.

In order to analyze trainees’ motivation and cognition, this research will refer to L2MSS (L2 Motivational Self System) by Dörnyei (2005) and social factors by Yoshinaga (2015). L2MSS indicates that the two self-images, ideal L2 self and ought-to L2 self, and a situational factor, L2 learning experience, will affect the motivation for learning a second language. Furthermore, Yoshinaga (2015) found that social factors which are apparently unrelated to learning a second language also affected one’s motivation for second language acquisition. Referring to these theories, this research will analyze trainees’ life stories in two periods, before and after coming to Japan, and try to look at trainees’ motivation from their cognition level and social level.

As a result, this paper found that the two self-images are always in the process of change due to social factors. This paper suggests that L2MSS are surrounded by and embedded into social factors, rather than being parts of the L2MSS framework which Yoshinaga stated (2015). Furthermore, trainees’ motivations are strongly influenced by a psychological factor, namely anxiety. In order to encapsulate the model of motivation, anxiety also needs to be considered besides L2MSS.

“DO YOU STILL REMEMBER WHAT YOUR PARENTS SAID?”:
RECALLING PARENTS’ ADVISING ACTS BY INDONESIAN
MILLENNIALS ON TWITTER

R. Januar Radhiya

(Chuo University/ STBA YAPARI ABA Bandung)

R. Dian Dia an Muniroh

(Indonesia University of Education)

In 2017, the proportion of millennials in Indonesia is the largest. These generations will determine Indonesia’s future. However, they are often judged negatively by older generations as they focus so much on technology that abandon Indonesian values and culture. This study is aimed to explore Indonesian values and culture that can stay in Indonesian millennials’ mind as reflected from their recalling of their parents’ advising acts, more specifically types of advice, language realization and norms of politeness. The method used in this study was a descriptive qualitative method. Data were collected via observation and documentation of netizens’ responses to a retweet of @AREA JULID account on August 20, 2021 about a question posted by @angga_fzn, “*Apa nasehat dari orang tuamu yang paling kamu inget sampe sekarang?*”(what is your parents advices that you still remember until now?) on Twitter. Data were analyzed thematically and by using speech act and politeness theories. The result show that things related to obedience to God, building good relationships with people and tips on how to face life were in the purview of the millennials. The millennials reported the advising acts of their parents by using negative and positive politeness. This study offers a way of transferring Indonesian good values and culture to millennials by adjusting parents’ advising acts toward the way millennials do.

Keyword: recalling, advising, speech act, politeness

Hojoki with Special Reference to Basil Bunting's English
Translation,

“Chomei at Toyama”

喜多 文子

(中央大学政策文化総合研究所)

This paper will examine Basil Bunting's poem “Chomei at Toyama” in 1933 based on *Hojoki*, the great literary work of medieval Japan by Kamo-no-Chomei (1155-1216) from a viewpoint of the comparative civilizations.

Basil Bunting (1900-1985), a British modernist poet, was born in Scotswood-on-Tyne, Northumberland. He is known as a Quaker and a poet of Northern England. It is said that “Bunting was neglected for years in his own country” until 1965 when his autobiographical poem, *Briggflatts* was published. Interestingly enough, however, in his early poetic career, Bunting wrote “Chomei at Toyama” out of the Japanese classic, *Hojoki*, although from an Italian translation by Marcello Muccioli.

Hojoki was written in 1212, when its author, Kamo-no-Chomei was about 58 years old. Chomei was pursuing a career as established court poet, however, he became a Buddhist monk and eventually moved to the rural area at Ohara near Kyoto, and later to Hino. The last hut Chomei built in Hino was very small and it gave *Hojoki* its name; literally “Notes from a Place Ten Feet Square.”

Chomei's *Hojoki*, which is a mixture of social chronicle and personal testimony, consists of three main parts; a series of calamities overtook Kyoto in the late Heian Period in the first part, his autobiographical description in the middle, and finally, a record of his thoughts and life in retirement from the world in the mountains southwest of the capital. *Hojoki* is relatively short, and Bunting translated it into a ten-page poem in three main parts preserving the original structure. Yet, it seems clear that Bunting did not necessarily intend to translate *Hojoki* word to word. In comparison between these two writings from different cultural backgrounds, I will argue why Bunting was interested in *Hoyoki*, and how this medieval Japanese text catalyzed Bunting to create his own *Hojoki* composed in the precarious time between the First and the Second World War.

兼愛非攻—墨子の思想、あわせて Me-Ti について

篠原 典生

(中央大学総合政策学部)

中国の春秋戦国時代は周王朝を核とした秩序体系が崩壊し、各地に諸侯国が乱立する弱肉強食の時代だと言われる。歴史的に見ると、秦始皇帝によって中国が統一される前の大分裂時代と捉えることができる。大国は小国を攻め滅ぼしてますます肥大化し、小国も同盟を組むなどして対抗した。このような時代背景のもと、諸子百家と呼ばれる多くの思想家があらわれた。

本報告では、まず考古学的発見から、この時代が物質文化的にも非常に多様性に富んだ時代であったことを明らかにする。春秋戦国時代の諸侯墓からは大量の青銅礼器が出土しており、商・西周以来の身分制度に関する価値観は共有されているが、その数量や内容を見ていくと、すでに秩序体系は厳格に運用されていないことがわかる。同時に、墓室の構造や他の副葬品からは商周文化の中心地である黄河中流域とは異なる地方文化の豊かさが示され、中国文明以外の他文明との接触も示唆される。

次に、諸子百家のうち、後に中国の支配的思想となった孔子の教えである儒学に対抗して論陣を張った墨子の思想を取りあげる。儒家の「仁愛」を制限付きの愛（別愛）だとして退け、自己を愛するように他者も愛せ（兼愛）と主張した墨子の思想は、戦国時代に活躍した儒家の代表的人物である孟子から猛烈な攻撃を受け、その後長く歴史に埋もれていた。それが近代になってキリストの教えに近い思想として掘り起こされ、ヨーロッパキリスト教世界に紹介されるようになった。本報告では近代ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトの「メ・ティ-転換の書」を手掛かりに、古代中国から近代ヨーロッパへ伝わる墨子の思想を検討する。国家間の争いやイデオロギー対立に翻弄されながらも、安易に多数派と妥協しなかった墨子やブレヒトの生涯を振り返り、「多様性」が喧伝されるのと同時に「価値観」による対立が深刻化する現代に生きる私たちの参考としたい。

遼河文明の「玉龍」から黄河文明の龍字まで

—中国文明の起源を検討する課題として—

汪 義翔

(東京理科大学)

「龍」と「玉」は中国古代文明のエートスを語るものとして、特に龍は中国文明の起源を示す重要な指標の一つと見なされ、数千年に渡り存続してきた中国文明のシンボルである。この中国文明のシンボルである龍の起源を探ることは中国文明の源流を遡ることにほかならない。

一方の玉は、龍の起源と龍文化の伝播に深く係わったとみられており、中国大陸において玉器の使用の始まりがおよそ 8000 年前、新石器時代の遼河流域に遡ることが近年の発掘で明らかになった。

これまで、龍崇拜の文化は黄河文明の農耕社会に広まっていた蛇信仰の観念の影響により生まれたという認識が主流であった。しかし、近年中国で急速に進められた古代遺跡の発掘により、各地で新石器時代の遺跡から龍を表現する造形物や龍の文様が描かれた玉器、土器が数多く発見された。これらの発見により、考古学的資料に基づく龍の起源の新たな考察が可能となってきた。

これらの龍文化に関連する発見の中で、特に、中国東北部を流れる遼河(りょうが)上流域に位置する内モンゴル自治区の赤峰(せきほう)地区および遼寧省西部地区の新石器時代の遺跡から出土した龍の造形を表す玉器(「玉龍」と呼ばれる)が、最も古いものとして注目を集めている。

さらに、新石器時代の後期から、中国大陸での地域間の活発な文化接触と玉器の拡散に伴い、遼河流域で誕生した龍崇拜の文化は次第に黄河流域へ拡散し始め、やがて、黄河中流域で誕生した初期王朝の文明社会へと受け継がれた。この流れの中で注目すべきなのは、遼河流域の紅山文化から黄河流域の二里头文化、殷代に至るまで、龍を表現する手法として、玉器と龍の一体化した形が綿々と継承されていたことである。つまり、玉器と龍の融合体である「玉龍」は、古代遼河文明から殷の文明へ、そして龍字出現に至るまで、龍の形象と龍崇拜の観念の伝播において一種の媒体として重要な役割を果たしていた。まさに、玉を語らずして龍の起源は語れないのである。

殷の時代には、亀の甲や牛の骨に彫られる甲骨文と青銅器に鑄込まれる金文といった中国最古の文字が出現した。龍字の最も古い記載は甲骨文と金文によるものである。龍字は、殷の人の持っていた龍の姿がより抽象化した象形として初めて文字化し、概念化したものであり、龍崇拜の観念がその時代と社会に定着したことが意味する。

殷の人にとって、玉器に彫られた「玉龍」は、彼らが抱く龍の姿そのものであり、それが甲骨文の龍字の創案に最も有力な根拠資料として用いられたのではないかと考えられる。

世界=生態論のメタ研究プログラム： 世界システム分析の人新世的拡張にむけて

山下 範久

(立命館大学グローバル教養学部)

今世紀に入って地球環境科学分野から急速に関心を集めて議論され始めた人新世の概念は、2010年前後から人文社会科学にも大きなインパクトを与え、グローバル・ヒストリーなど、マクロな歴史的研究では特にその影響が大きい。

前世紀においてマクロな歴史的研究のパラダイムであった世界システム論にも、当然にその影響は及んでおり、特に顕著な展開として Jason W. Moore の世界=生態論が挙げられる。本報告では、Moore がその世界=生態論を展開した *Capitalism in the Web of Life* を主に取り上げ、歴史的社会科学のメタ研究プログラムとしての世界=生態論の射程を、特にウォーラステインの世界システム分析との連続性の観点から検討する。

ウォーラステインが創始した世界システム分析（世界システム論）は、マルクス主義史学におけるいわゆる移行論争への介入として、それ自体ひとつの歴史記述を提示する個別研究でありつつ、別の次元では、社会科学と歴史学のディシプリンの再編成をともなうメタ研究プログラムという側面を持っていた。しかし 1970 年代に提起され、40 年近くにわたって書き継がれた『近代世界システム』のプロジェクトは、その過程で大きな理論的重心のシフトを刻印されており、大きく前期と後期に分けられる。前期では近代世界システムは、資本主義的な世界=経済としての実体としての側面が強調されており、その客観的なメカニズム/ダイナミズムの解明に重心があったが、後期では資本主義的な世界=経済の再帰的な自己認識の次元を介して駆動するメカニズム/ダイナミズムの解明に重心が移った。外在的な歴史的アプローチから、内在的な社会学的アプローチにシフトしたということもできる。

このシフトは、『近代世界システム』のプロジェクトが進むなかで、その記述対象となる時代の遷移と書き手の埋め込まれた「現代」自体の変化の両方が記述に織り込まれるように生じたものであり、それゆえその(不)連続性は直接的には明示されていない。他方、Moore はこのシフトに触れることなく従来の世界システム分析を二元論的な限界を持つものと総括している。本報告は、Moore の提起する世界=生態論をメタ研究プログラムの次元で再構成することを通じて、それが世界システム分析をシフト後の枠組みからシフト前の枠組みを包摂するかたちで拡張するものであることを示すものである。

20 世紀初頭の亡命ロシア社会学者による文明変動論

—P. A. ソローキン、G. ギュルヴィチ、N. ティマシェフを例に

吉野 浩司

(鎮西学院大学現代社会学部)

20 世紀は亡命の世紀であった。ロシアでは 1917 年の革命後に、大量の亡命知識人が世界各地に離散した（亡命の第一波）。革命以前にロシア国内で要職にあったもの、あるいは知識人（インテリゲンチア）の多くは、革命後、反革命ないし反ボルシェビキ勢力として一括され、亡命を余儀なくされた。社会学者も例外ではなかった。P.A.ソローキン、G.ギュルヴィチ、N.ティマシェフといった（広い意味での）社会学者たちは、革命により、ロシア国外へと生活の場を移した。

第一波の多くは、まずは受け入れが積極的であったチェコスロヴァキア（プラハ）に移動し、そこでロシア人ネットワークを形成した。その後は、同国に留まるもの、あるいは次の移動先を見つけるものなどがいた。主な移動先は、フランス（パリ）、ドイツ（ベルリン）、アメリカ（ニューヨーク）であった。

本報告で取り上げる三人の社会学者のうち、P.A.ソローキンと N.ティマシェフはアメリカで、G.ギュルヴィチはフランスでその後半生を送った。彼らはそれぞれ、亡命先の国で、学問的業績を挙げた。ソローキンはアメリカ社会学（農村社会学、社会文化変動論、利他主義研究など）、ティマシェフはアメリカ法社会学（法制史、刑法学など）の確立にそれぞれ寄与した。ギュルヴィチはフランス社会学の批判的継承者として、深さの社会学、あるいは動態学派（G.バランディエ、A.トゥレーヌら）の始祖として、学会に寄与した。彼らは研究経歴としては法学を共通基盤とし、創世記のロシア社会学の確立期に自らの学問を形成した。また革命と亡命を経験した。その経験によって、彼らが目にしたのは社会システムの相対性である。それによって意識の表層と深層（表面と内面、タテマエとホンネ）が必ずしも一致していないことを常に意識していた。また支配者の側の理論（規範的理論）ではなく、市民の側の理論を組み立てようとした。そして何より社会は固定的な物ではなく絶えず流動することを、「動態（dynamic, dynamique）」という言葉で表現した。

彼らの社会学が 1968 年の大学紛争の時代を生き延び、経済開発・支援とは別の南北問題への解決案を示すことができたのは、彼らのロシアにおけるバックグラウンドがあったからに他ならない。それはグローバル化と民族主義により、国境や支配体制の変更が絶えない現代社会を理解するための、有効な視座を与えてくれるものである。

南フランス、オクシタニーの領域性とアイデンティティ ——統一国家における地域多様性の視点から

安達 未菜

(東海大学文化社会学部)

フランスの社会言語学者アンリ・ジオルダン¹は、今日のフランスを「一体性と多様性の矛盾した混在」と呼ぶ。1958年に制定された現行の「第五共和国憲法」では、その第1条に共和国の不可分が、第2条に国家言語が唯一フランス語であることが謳われ、フランスの国家としての一体性が見出される。他方、フランスでは地方共同体の文化・社会の多様性を背景として、国家と地方自治体間の関係が見直され続けている。これは、フランソワ・ミッテラン大統領政権下の1982年に「市町村、県及び州の権利に関する法律」が制定されて以来続く、中央集権体制改正の動きに見られる。実際、2015年8月7日に地方組織に関する法律(NOTRe)が發布され、報告者の研究対象であるプロヴァンス地方においても、2016年に新たに地方自治体間の協力機構であるメトロポール(EPCI)が新設され、地方自治体間の権限や行政協力が明確化された。また、2016年9月に南フランスのラングドック=ルシヨン、ミディ=ピレネーが統合され、オクシタニー地域圏が成立した。

しかし、現在の地方分権化はフランスの多様な言語の存在と地方共同体の主張を是認するものの、それらの権利を真に擁護することを目的としたものではない。実際、1992年の「ヨーロッパ地方言語・少数言語憲章」では、フランスは調印しているが批准していない。この憲章が違憲であるとされた所以は地域言語または少数言語の容認が共和国憲法にそぐわないと判断されたからであった。すなわち、フランスには統一国家と複数のローカルな文化・社会共同体という二層構造が見出される。

中世諏訪の神仏習合「諏訪流神道」における胎生学的思想

岩澤 知子

(麗澤大学)

現在、日本宗教史、中でも神道史の分野では、「神道とは何か」という問いの解明が、一つの重要な課題とされている。従来の神道観が、神道とは日本に連綿と続く固有信仰であり、経典のない自然と調和した日本人の民族性を体現する「超歴史的信仰」であると主張する、ある種の「原理主義的・排他的傾向」を孕みがちだったのに対し、近年の神道研究の発展は、この議論に新たな光を投じ、神道はあくまでも、古代・中世・近世・近代の時代ごとに異なる相貌を呈してきた「歴史的形成物」であることを明らかにしてきた。これまで「神道」として一括りにされてきた概念が、現在では、(1)ヤマト朝廷成立以前からこの列島に存在したさまざまな「カミ信仰」、(2)ヤマト朝廷によって8世紀に確立された「神祇制度」、さらに(3)中世の神仏習合を経たのち、仏教との差別化を図ることによって新たな独立概念として登場した「神道」、という重層的な歴史を孕むものとして語られ始めたのである。

こうした近年の議論を踏まえ、本研究は、長野県の「諏訪大社」を対象として、これまでほとんど取り上げられることのなかった中世諏訪の神仏習合「諏訪流神道」の分析に焦点をあてている。諏訪古来の「カミ信仰」が、古代律令制により導入された「神祇制度」、さらに中世における「仏教」との交渉を通して、いかに多義的な神の姿を創出するに至ったか、その豊かな歴史性や多様性を明らかにすることが、本研究の目的である。今回の発表では、その「諏訪流神道」のカミ観念を、「胎生学的思想」をキーワードに探っていく。

本発表の骨子は、以下の通りである。

諏訪祭政体には、古代より「大祝」と「神長」による「双分的首長制」が存在していたことが知られているが、これは諏訪古来の「カミ信仰」と、ヤマト朝廷によって確立された「神祇制度」との重層性を象徴するものと考えられる。本発表ではまず、(1)この「双分的首長制」が歴史的にどのように形成され、それが中世諏訪における神仏習合「諏訪流神道」の誕生にいかに関わっていったかを考察する。この「諏訪流神道」の誕生に大きく貢献したのは、室町時代の神長・守矢満実だと考えられるのだが、本発表ではさらに、(2)この「諏訪流神道」の儀礼の中に、当時の密教思想の影響を強く受けた「胎生学」の考え方が存在していたことを明らかにする。諏訪における「胎生学的思想」は、しかしながら、密教において実修された儀礼のあり方を超えて、諏訪独特のスタイルを生み出していく。最後に本発表では、(3)その諏訪独自の儀礼の構造を分析しながら、「諏訪流神道」が表現するカミ観念とは何か、それはどのような宗教的意識として、日本の宗教思想史の中に位置づけられるか、を議論する。

『民主主義と私』という著書から見る 1950 年代における趙炳玉の 民主主義思想の特徴—李承晩との比較を中心に—

高城 建人

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程 3 年)

本研究は、李承晩政権期（1948—1960）韓国の主要野党政治家である趙炳玉（1894—1960）の 1950 年代の民主主義思想に関する研究である。具体的には 1959 年に趙炳玉が書いた『民主主義と私』という著書の分析を通じて 1950 年代に彼は民主主義についてどう考えていたのかについて主に政治制度・民意・政党認識・反共主義認識を中心に分析する。そして彼の民主主義思想と当時の韓国の大統領であった李承晩のそれとの比較を行い、両者の共通点と相違点について述べることにする。

趙炳玉は 1910 年代から 20 年代までアメリカへ留学していた関係上、アメリカの自由民主主義思想と反共主義の思想を生涯にわたって持ち続けていた。そして 1948 年の大韓民国政府樹立後、特に野党政治家へ転じた 1951 年以後趙炳玉は新聞や記者会見、著書の執筆を通じて民主主義に関する自らの考えを本格的に表明していく。

政治制度に関して趙炳玉は、①議院内閣制の選好②多様な民意の想定と言論と少数派の意見の尊重③政党を民主主義にとって必要不可欠な存在と認識④社会民主主義を共産主義と同じだとみなす徹底した反共主義認識、以上 4 つの特徴を持っていた。同認識の背景には、議会民主主義と政党民主主義、自由主義と多元主義の考えに基づいていた。

そうした趙炳玉の民主主義思想は当時の韓国の大統領であった李承晩（1875—1965）のそれとは異なるものであった。李承晩は①大統領制の選好②一枚岩的な民意認識③否定的な政党認識の特徴を持っていた。それは、「すべての中間団体を迂回し政治指導者と民と直接疎通をはかるべきだ」という儒教の一君万民思想や西洋の国民民主主義の考えに基づくものであった。

他方趙炳玉と李承晩の民主主義思想には共通する面もあった。それは、①徹底した反共主義と②民意の対象範囲の 2 つである。両者は反共主義を徹底して追求し、社会民主主義などグレーゾーンの分野でさえも排除する姿勢を取っていた。また、両者とも民意の対象範囲を現在の韓国国内の反共主義を持つ人々（事実上の韓国国民）に限定し、韓国国内の共産主義者を民意の対象から排除する姿勢を取った。

民主主義思想に関して趙炳玉と李承晩は共通点と相違点があったわけであるが、両者は野党と与党の指導者として互い対立と協調を通じて 1950 年代の韓国政治をリードするようになっていく。

岡倉天心の「日本美術史」から見た東洋思想

銭 正枝

(京都大学大学院 人間・環境学研究科)

19 世紀後半、「美術」という概念が西洋から日本に入り、近代的な「日本美術史」が初めて大学で講じられた。近代日本における代表的な美術運動家、思想家である岡倉天心が 1890 年から 1892 年まで東京美術学校で「日本美術史」を講義し、東洋美術と東洋思想とのつながりに関する内容にも多く言及した。

岡倉天心の「日本美術史」が単純な美術品と流派、画家に対する分析より、ある程度総合的に文化史を論じたことが特徴の一つとして認められる。その中、東洋における美術と思想との関係性は非常に深いように論じられた。具体的に言えば、まず講義によると、古代の中国は漢の頃まで書と画との区別がなく、美術を通して人間の考えていること、精神的なことを表現するのが自然な展開だと考えられる。また、思想が抽象的な面と具体的な面の両方から美術に影響を与えたことがわかる。抽象的な面から見れば、東洋美術の性質に東洋思想の影響が伺える。例えば、東洋美術には「仏教の哲理により唯神論に傾き、写生を離れて実物以外に美の存在を認む」という特徴が講義の中で論じられた。それは仏教が画風に与えた影響である。一方、具体的な面から見れば、講義において思想の「造形化」による美術の発達論が論じられた。再び仏教の場合をみると、仏具を作って多国で使用することと、盛んに仏像をつくるのが美術の発展につながった。それに、山水草木以外、天部と地獄、六道などが美術の内容になり、新しい題材を提供したと思われる。

東洋美術と思想との深い関係性を理解した上で、本発表は、岡倉天心の言説の考察によって、近代日本における美術と東洋思想および東洋哲学との関係の実態をより細かく探求しようとするものである。それに、近代日本における「美術」の概念の受容過程を考察しながら、19 世紀末における「東洋哲学」の成立と展開をもう一つの背景として注目し、そこから生まれた東洋思想の近代的解釈との関係性にも焦点を合わせたい。

「環境 QOL」概念の導入と展開—現代文明における環境とアイデンティティの関わりから

報告者：平野 葉一（東海大学文学部文明学科）

共著者：中嶋卓雄・鷹取勇希・安達未菜

現代文明を考えるうえで環境問題は喫緊の課題である。昨今の異常気象に見られる気候変動問題は著しい。2021年に入ってICPPは地球温暖化を公に表明したが、実際にグリーンランド高地で観測史上初の降雨、大西洋南北熱塩循環（AMOC）の停滞の兆しなどが報告されている。現在では世界規模での脱炭素化のように、人間と自然との sustainable な共存、共生に向けた対策がはかられている。こうしたなか平野・中嶋は「環境 QOL」概念を導入し、その必要性を検討してきた（2017）。この概念はかつて伊東俊太郎が人類と自然の有機的・縁起的連関を説いた「環境革命」（1996）に通じるもので、人間が自ら存する空間の環境を保持することで自らの存在—生きることの質—に満足を感じることを意味する。「環境 QOL」はそれ自体概念的な枠組みであり、科学技術に依存する文明の在り方に再考を促すが、それは科学技術だけの問題ではない。人間が身の回りの自然を認識し、理解することは、個人および個人が属する社会集団の文化営為であり、それ故に「環境 QOL」が対象とする環境は自然環境に留まらず社会的、文化的環境をも意味することになる。これに関し、人間が生きる空間としての環境への意識とそこに生じる個人や社会のアイデンティティとの関係としての「環境 QOL」の検討が始められている（Hattori & Hirano, 2021）。

実際、科学技術文明はそれ自体多数派支配の性格をもつ。科学技術を手にした西欧近代文明は植民地政策を含む帝国主義を展開させた。今日の先進国と途上国の関係でも、そこには政治的、経済的、あるいは軍事的な強者と弱者が存在する。実際、科学技術文明は人間の *comfort* と *wealth* に対する欲望を冗長させるという *strategy* を内包し、それ故に世界を巻き込んで展開してきた。今日の環境問題もその延長線上で論じられるし、人間や社会を取り巻く種々の問題もまた同様である。こうした視点から、本研究では現代文明においてともすると支配的とも考えられる事例を挙げ、その構造を分析する。具体的には、科学技術と環境の問題の他、人間の文化営為としての言語・文化の問題（フランスにおける近代国家と地域の関係、英語支配による価値の一様化）を取り上げ、人間存在のアイデンティティと環境を意識した QOL の向上（その意味で環境 QOL の意識向上）との関係について検討する。

参考文献：

伊東俊太郎「文明の転換と自然観の変貌」、『講座文明と環境 第15巻新たな文明の創造』、朝倉書店、1998（1996）年、pp.12-24.

平野・中嶋、「コア・プロジェクト「森里川海研究」の方向性—環境 QOL の導入の一試論として—」、『文明』、東海大学文明研究所、No.22（2017）、pp.35-44.

Hattori and Hirano, “Importance of local identity for concept expansion of environment-related quality of life”, ICICIC2021, Sept. 15-16, 2021.

エーリッヒ・ノイマンの比較文明論

——『芸術と創造的無意識』（1954年）を手掛かりに

秋丸 知貴

（上智大学グリーンケア研究所）

C・G・ユングの高弟であり、分析心理学の重鎮であるエーリッヒ・ノイマン（Erich Neumann: 1905-1960）は、『芸術と創造的無意識』（1954年）で深層心理学的観点から比較文明論に取り組んでいる。本発表は、その内容を読解しつつ現代的諸問題への適応可能性を探る。

ノイマン自身によれば、この本の研究テーマは、①一つの時代とそこに生きる創造的芸術家がどのような関係にあるのかを明らかにし、②現代の創造的芸術家が現代芸術において表した現代文明の本質的問題を解明することである。

①についてノイマンは、芸術家の創造性は、S・フロイトのように個人の生育歴における病的原因に由来するのではなく、人類に共有の集合的無意識のあくなき力動性に深く繋がることに由来するとしている。創造的芸術家は、そうした集合的無意識における元型を触媒に、時代が求めるシンボルをいち早く生み出す。そのシンボルはその社会に共有され、社会の集合意識を方向付ける働きをする。その一方で、時代が変化し、既成のシンボルが時代と合わなくなると、創造的芸術家は再び集合的無意識において元型を触媒にして新たなシンボルを生み出す。特に、レオナルド・ダ・ヴィンチのようにその時代を代表する最も優れた芸術家は、自らの意識的自我と無意識的自己の「個性化」と並行して、社会の集合的意識と集合的無意識のバランスを実現するシンボルを生み出すと指摘している。

②についてノイマンは、現代は科学技術の暴走により、二度の世界大戦と原子力爆弾が実現してしまった苦難の時代であるとしている。これは、近代西洋文明の「父性」元型に基づく意識の肥大化が原因であり、戦後はこれに対する補償として「母性」元型に基づく無意識の活発化が新たな特徴になりつつあると考察している。現代芸術において、キュビズムやシュルレアリズムなどの主題の無意味化や形象の解体はその「母性」元型の負の側面の反映であるが、その一方で「母性」元型の正の側面を象徴するシャガールやヘンリー・ムーアなどの穏やかな人類愛表現が新たな主流となりつつあると分析している。

結論としてノイマンは、こうした現代芸術の諸動向を手掛かりに、古来人類はどのような時代でも、時間的にも空間的にも様々な文化・文明の財産を基に、常に新たな文明における正と負の両側面を統合してきたのであり、そこにこそ希望を持つべきであると洞察している。

文明の生成発展の要件～ダニレフスキー、トインビー、村山節の

比較から

服部 匡成

(文明法則史学研究所、トインビー・歴史の研究会)

コロナ禍において、文明は閉塞状態に入ってしまったかに見える。至近の西欧文明及びその影響地域において特に重要な価値とされてきた「自由」は、ロックダウンやワクチンパスポートといった一種の規制やSNSにおける情報統制ともいえる行為などにより脅かされている。一方の「平等」は、性におけるマイノリティへの過度な配慮が、たとえば五輪などにおいて逆に悪平等を招いているといった指摘もなされている。

約 20 年前から広がりだした「人新生」は、人類の地球に与える影響の大きさから示したもので、しばしば人類は滅ぶしかないという厭世的な解を導くがこれも西欧文明が作り出したものである。

このように、西欧文明が行き詰りを迎えているとも思える現下にあって、これまでの西欧文明と異なる、新たなる価値観に基づく文明を生み出し、発展させていくことが人類的な課題ではないかと考える。

そこで、私は、危機に直面した人類がいかにして新たなる文明を生成発展させていけばよいのかについて、文明論者の知恵を集積することによって、何らかの解が導けないだろうかと考えた。

モンテスキューやシュペングラーなど、衰退に焦点をあてた文明論者は多いが、文明の発展する条件に焦点をあてた論者はそれほどでもなく、ロシアのニコライ・ダニレフスキー (1822-85) はその一人である。彼は、その著書“Россия и Европа. Взгляд на культурные и политические отношения Славянского мира к Германско-Романскому” (発行 1895 年、英訳版 “Russia and Europe The Slavic World’s Political and Cultural Relations with the Germanic-Roman West” Translated and Annotated by Stephen M. Woodburn 出版 2013 年) において、文明が生成発展するためには、その民族の政治的自立が必要であること、文明の根本原理たるものは自国の歴史や同時代の他国から影響を受けつつも、他の独立した文明に完全に移植してしまわないこと、同一文明内の多様性が必要であること、などを述べている。文明の生成発展を取り扱った文明論者はダニレフスキーだけではない。トインビーの挑戦・応戦の考え方も、日本の文明サイクル論者である村山節の「社会システム」の成立・発展の見方も該当する。

そこで、今回の発表では、ダニレフスキーの示した生成発展の理論について検証を行うとともに、トインビーが提示した挑戦と応戦の理論が示す文明発展の要件及び村山節の「社会システム」の成立・発展の要件と比較考察することによって、文明の生成発展のための必要条件の再定義を示す。その上で、その定義に即して、日本文明を再び成長に向かうことを想定した場合の課題を整理し、その要件を提示する。

人新世における自然の問題をめぐって

小林 雅博

(神奈川工科大学、東京基督教大学)

〈人新世〉という新しい地質学的概念、つまり、地球という惑星の自然環境が人間の生存に適さないものへと変容しているという事態は、2021年度に発生したいくつかの気候変動的現象を列挙するだけでも、その現働化を容易に確認することができる。いまだ過渡的段階であるとはいえ、私たちの文明は、線状降水帯、気温上昇、コロナ禍といった新しくも重層的な危機の発現によって、その在り方に対する根本的な認識の変化が求められている。その一例として、連日つづいた豪雨の後に、私たちの住居の土台となる大地そのものがまさに「崩落」したことを挙げることができよう。豪雨は河川の氾濫を誘発し、それによって私たちの生活する空間は水浸しとなる。そこに、もはや常態化した新型コロナウイルスに感染する恐怖が日常として加味されているのが、私たちが生きる文明の現在である。このような文明のリアリティを認識したあとで、このような重層的危機の時代に生まれ育っていく人々のために、文明学はどのような理念的希望を呈示することが可能なのか。私たちを取り巻くものとしての自然（モートン）が激変した現代文明において、私たちはどのような自然概念を新たに創造していけばよいのだろうか。本発表ではこの問題を、T・モートンやI・H・グラントの自然哲学などととも検討していく。

地球気候力動性の絶滅哲学——地球気候体实在論と人類絶滅

星野 克美

(多摩大学名誉教授)

[今世紀末人類絶滅シナリオ]「超短期間のCO₂濃度急上昇」仮説(D. H. Rothman)により、PETM 紀大絶滅に相当する最悪シナリオでは、60年後の「2080年:CO₂濃度800ppm」に現世人類の絶滅が想定され、子供・孫世代が遭遇する可能性が見えてきた。

[CO₂排出ゼロ政策の破綻]IPCCは『第6次評価報告書』(21年8月)で「人間の影響が地球温暖化を起こしたことは疑う余地がない」と警告し、CO₂排出ゼロ投資強化を要請しているが、コスト増加・財政破綻・投資資金調達困難・金属資源枯渇のため挫折する。

[CO₂排出ゼロ政策のショックドクトリン]CO₂排出ゼロ政策は「惨事便乗型資本主義」(N. Klein)に取り込まれ、資本主義衰退のため挫折する。P. Thompsonの予測による「無秩序移行期:2030~50年」には石油燃料化・原発稼働化に回帰する可能性がある。

[思弁的实在論の地球気候体モデル]人類絶滅を思考する思弁的实在論など現代哲学は、「人類・文明の外部思考」に拠点を置く「カオス・無秩序・自律力動・モノ独立性」の实在性哲学公理を提唱する。「人為の影響」で破壊された地球気候構造体の实在性は、この公理に根ざす故に、「人智を超える制御不能な”Anarch-Burst Climate Dynamics”の無秩序自律力動性の気候体となって、巨大絶滅圧力で「6度目の生物・人類絶滅」を引き起こす。

[人類自己絶滅の哲学公理]人類が地球気候体の破壊を停止できず自らの絶滅を来したのは、①「人類悪性論」(F. W. J. V. Schelling/E. Kant/E. Fromm)に根ざす、②「リビドー経済の自己破滅的衝動性」(G. Deleuze/J. F. Lyotard)を自己制御できず、③「プロパガンダ資本主義」(K. Hoshino)が“Utopia”の虚構を打ち上げ続けて、④「偶像の黄昏」(F. Nietzsche)に至るという「絶対矛盾的自己同一」(西田幾太郎)が文明構造に内在化するからである。

[ディストピアと絶滅哲学]工業文明滅亡(2050~60年代)による貧困化・人工物残骸化と気候危機臨界点超え(2030年1.5°C上昇/2050年2°C)による災害激化・感染症抑止力喪失・都市水没化で、「気候絶滅圧力」に抗しきれず、人類・文明は生死相克を迫られて“Distopia”へ転落する。”memento mori”が日常化すると、「死の哲学」(田辺元)/「人類死学」(J. Derrida)再考から、「絶滅思考思弁的实在論」(T. Morton/Q. Meillassoux)を超える、「絶滅哲学(Extinction Philosophy)」(K. Hoshino)が普遍的世界観となる。

視覚技術と時間：記憶と自由の危機と回復

犬塚 潤一郎

(実践女子大学)

時間は空間と同じく、物理現象を把握・記述するための基本的な軸(参照、座標、次元)とされているが、時間そのものは直接に認知し、理解、言語化することができない。運動や空間、出来事など、認知可能な(他に概念化される)ものを媒介として、隠喩的・換喩的に表現・概念化される。

そのことは概念メタファー研究(Lakoff and Johnson)にもよく知られるが、時間を空間表象(視覚)への現れとしてとらえることは、古代ギリシア哲学における運動を媒介とする論、また日本の詩歌における風物表現(叙景)など、理論また芸術の探求にも広く見ることができる。

個人意識においては、時間的な認識は記憶に関わる。概念は、記憶されたものの間の関連付けに生成すると考えられ、自己意識(私)が対象化される際も、記憶に根拠が求められる。

意識における時間は、失われつつ(過去)生じつつ(未来)ある今、という、近接する過去と未来がつながる現在である(primary retention, Husserl)。一方、“今”の知覚に含まれない(遠い)過去と未来は、つまり語られ表現されることを通じて認識される時間対象では、その意味内容を生み出す構造は技術に依存することになる。

私(個性)の基盤をなす文化とは、自分では経験していない(生きていない)場所(時間・空間)の記憶である。この記憶の継承を媒介するのは、道具や建築物など、動作・所作を通じて身体化するものと、シンボルやテキストを介して、読まれ解釈されるものとのことである。そして現代ではそこに、“視られ聴かれるもの”(audio visual)が加わっている。

その本質を、写真の技術にみることができる。写真を見る人が、写真そのものではなく、そこに写っているものを視ようとする傾向である。認知構造としては、写真自体(モノとそれを生みだしている技術)は、まるで透明なもののように働く。それは作品(表現物)として意識され続ける絵画とは対照的である。そして、写真の満ち溢れる環境では、今ここにはないものが私的な経験(今の知覚)の対象となるのである。

さらに現代の生活環境は、書かれたもの(プログラム)の内蔵を特徴ともしている。私たちは、技術という知(インテリジェンス)が外在化し埋め込まれた環境(extended technification)を世界として生きていると言い換えられよう。

現代文明の特徴を、この記憶の取り違え・混乱・支配であると捉え、その克服の道を、自由を選択から、また記憶を記録格納から、概念的に区別し、視覚技術の回復を試みるところから検討する。

アングロスフィアに対する比較文明論的考察

林 正博

(東京都市大学 理工学部 電気電子通信工学科)

カナダ、オーストラリアなど多くの国々がイギリス国王を自らの君主としている。インドは共和国であるがイギリス連邦の一員である。アメリカ合衆国とイギリスは共通言語と共通文化で結ばれた特別な関係にある。このようなイギリスとそのパートナー国家からなる国家群は、近年アングロスフィアと呼ばれるようになった。そして、近年、アングロスフィアに属する国々の力を再結集し、中国と対抗しようとする動きがある。

アングロスフィアの規模を考えると、その再結集は地球上の全文明に関わることから、比較文明論の格好の研究対象であると考え、本発表で取り上げる。

まず、近未来において地球を覆う統合国家、すなわち、世界国家が誕生するという比較文明論の基本的な主張を振り返る。そして、新たに、アングロスフィアの再結集の先に世界国家が誕生するというシナリオを提示する。次に、比較文明論の先人達（シュペングラーなど）が「近未来の世界国家には君主がいる」としていたことと、アングロスフィアには君主（イギリス君主）が存在する事実がマッチし、その後継者が近未来の世界国家の象徴的君主となるという考え方を示す。その上で、このシナリオの必然性を、以下のような民主主義の本質に関わる議論から論じる。

1. 多数決で物事を決定する民主主義国家もしくは共同体が、複数の利害を異にする集団からなる場合、ある集団の貢献度が大きいにも関わらず人口が多数を占めていなければ不満が生じる。
2. 不満を持った集団は独立運動を始める（ブレグジットは正にそのような独立運動）。つまり、民主主義は分離を促す。
3. 分離主義の傾向を強く持つ民主主義国家もしくは共同体が、逆に拡大路線に走る場合がある。その場合深刻な矛盾が生じる。
4. 例えば、ある国家を新たに合併した場合、民主主義に従って合併地の住民に選挙権を与えたとすると、それは合併した側の政権を倒す方向に作用する可能性があり、そもそも合併の意味がない。

民主主義者であったはずのナポレオンは、ヨーロッパの大半を征服した結果、上記の矛盾に陥った。そして、矛盾を回避するための苦肉の策として、あろうことか皇帝となった。古代ローマにおいてアウグストゥスが皇帝となったのも同様の経緯である。

世界国家の構築は拡大路線であり、分離を促す民主主義と矛盾する。従って、未来の世界国家もまた、アングロスフィアのような君主を持つ共同体を中核とせざるを得ない。

サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』が語っていたもの ——還元主義を超えて

三枝 守隆

(トインビー歴史の研究会、立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻)

アフガニスタンでは、米欧が民主主義政権を維持しようと試みたがその政権が崩壊し、米欧軍は今まさに撤退している。そこでは過去にもわれわれに説明を求めるような事象が起こってきた。たとえば、1980年代には、ソ連軍が活動したが撤退し、共産主義政権は崩壊。1800年代には、英印軍は三回もアフガニスタンで活動したが撤退。1500年代に西欧の鉄砲が伝来した時、アフガニスタンの人々も鉄砲の自主的製造に成功、など。

このような事象が生じた理由について議論するのに適しているのが、われわれの比較文明学の学術言語共同体であろう。というのも、加速度化するグローバル化は、空間的な広がりをだけでなく、時間的にも世界史のなかで議論することを請求しており、それに十分に答えているか否かはともかく、われわれはそれについては敏感だからだ。もはや地域史や地域研究では、世界各地の人々を納得させる得る議論はできない。

今回の発表では、そのような事象の説明についての議論の先行研究として、Huntington, Samuel, 1996, *The clash of civilization and the remaking of world order*, Simon & Schuster. (=1998、鈴木主税訳、『文明の衝突』、集英社) を取り上げる。

ハンチントンは上記の単書に先立って1993年に *Foreign Affairs* 誌に論文 *The clash of civilization* を発表していた。それは世界的に反響を呼んだが、日本ではおおむね否定的だった。たとえば1994年の『比較文明』では、「このハンチントン論文は出来の悪い大学院生のレポートといったところがある」と評された。

同誌や他の書評を今日からみると還元主義的な議論が目につく。ここでの還元主義には、「……にしか過ぎない主義、“nothing-but”ism」、つまり「AはBにほかならない」、故に「Aは、ほんとうは存在しない」ということを、含意する。すると、「文明の衝突」も経済的基盤に還元できて「貧困」が原因である、となる。民主主義や共産主義の福音をもたらそうという当事者にとっては道徳的な試みも、米ソの利己的動機へと還元される。つまり、文明の衝突などないし、文明間の対話と共生をめざすべきだという、当為の議論に置き換えられている議論が多い。

還元主義的な議論の進め方は、一般的に言って対話(ディアレクティケ)それ自体を封じ込めてしまう傾向がある。今回、『文明の衝突』というテキストと対話をするにあたり、そうならないように努めたい。とはいえ、西欧のマスコミが「テロ」と言う事象を、イスラムのマスコミでは「シャヒード(殉教)」としばしば言うのには、困惑させられるのだが。

第 39 回大会実行委員会

委員 長	加藤 久典	中央大学	教授
委員	保坂 俊司	中央大学	教授
	小倉 紀蔵	京都大学	教授
	中牧 弘允	国立民族学博物館	名誉教授
	小西 暁和	早稲田大学	教授
	島田 竜登	東京大学	准教授
	吉田 晃章	東海大学	准教授
	汪 義翔	東京理科大学	准教授
	喜多 文子	中央大学政策文化総合研究所	客員研究員
	大森 一三	東京学芸大学	特任准教授

協 賛 中央大学政策文化研究所

比較文明学会第 39 回大会プログラム

発行日：2021 年 10 月 3 日

編集・発行：比較文明学会第 39 回大会実行委員会 事務局

mail: jscsc39th@gmail.com